「幸いと不幸」（ルカによる福音書六章一七～二六節）

1　平地の説教

ここ何回かにわたり、ルカによる福音書によって私どもが辿っているのは、ガリラヤにおけるイエスの活動、働きです。

イエスのこの諸活動は、一般に「宣教」と呼ばれます。福音書自身がそのように呼んでいます（三・二三、四・四四）。

ただ日本語で宣教というと、「教」えを「宣」べるですから、言葉によるイエスの活動しか意味しないように思われますが、そうでないことは、皆さんよくご承知の通りです。イエスの宣教には、病人をいやすという具体的な行動が、重要なこととしてふくまれていました。教える、福音を宣べ伝える、そしていやす、これがイエスの宣教であったのです。

こうした種々の働きを通して明らかにされたのが「神の国」です。神の国の「国」とは、これも皆さんご承知のように、何か一定の領域、一定の場所を意味していません。神の国とは、すなわち、神の支配、王なる神の支配です。

イエスがその教えによって、そのいやしによって明らかにしたのは、この神の支配でした。それがいま、イエスご自身と共に現実になっているということです。いまここで神の支配がなっているなら、どうしてこの神に敵対する力、悪の力、悪霊のわざがなお人の命をおびやかしたり、正気を失わせたり、禍をもたらしたりすることがあるのでしょうか。あってよいのでしょうか。福音書がしばしばイエスの怒りに言及するのは、そのためです（マルコ三・五他）。神の支配がなっているなら、そうしたことはあってならないからです。神の国、その支配が御子イエスにおいて到来した、現に存在している、そのしるしがいやしにほかなりません。

さて私ども、ルカによる福音書四章、五章、六章と、このイエスの神の国の宣教を辿ってきて、いやしのことがずいぶん多く語られていたような気がいたします。たとえば「汚れた霊に取り憑かれた男のいやし」（四・三一）、「重い皮膚病の人のいやし」（五・一二）、「中風の人のいやし」（五・一七）、そして「片手の萎えた人のいやし」（六・六）等々です。

こうしたことを受けて、今日の聖書箇所も、次のように記しています。

> 大勢の弟子とおびただしい民衆が、ユダヤ全土とエルサレムから、また、ティルスやシドンの海岸地方から、イエスの教えを聞くため、また病気をいやしていただくために来ていた。汚れた霊に悩まされていた人々もいやしていただいた。群衆は皆、何とかしてイエスに触れようとした。イエスから力が出て、すべての人の病気をいやしていたからである（一七～一九節）。

ただこうした、いわば「まとめ」のようなところでも、「教えるイエス」の姿にきちんと言及していることを、私どもは聞き逃してはなりません。そして教えを「聞く

ために」、大勢の弟子たち、おびただしい民衆が、近くからも、遠くからも押し寄せていたのです。

そのイエスの教えが、いま改めて語り出されます。それが、今日の箇所から始まる第六章の後半です。

今日の箇所を読んで、マタイの山上の説教を思い出した、それと同じだとお感じになった方が多いと思います。その通りです。マタイよりもずっと短いのですが、共通の内容を含んでいます。

ただルカによる福音書の場合は、一般に、山上の説教とは呼ばれず、平地の説教と呼ばれます。その理由は、今日の箇所の最初のところにあります。

イエスは彼らと一緒に山から下りて、平らな所にお立ちになった（一七節）。

山を下りて、「平らな所」に立ち、そこで語り出された、そこで平地の説教と呼ばれます。この直前の箇所を見るとイエスは祈りのため山に上られます。夜を徹して祈り、次の朝、大勢いた弟子たちを呼び集め、その中から一二人を選び出し、彼らを「使徒」と名付けたとあります。そして彼らと一緒に山から下りて、平地に立たれ、語り始めたのです。

山の上でイエスは、神の国の宣教がやがてその者たちによって担われていく人をお選びになります。イエスは神の国の宣教に、私ども人間の参加を、はじめから求めたのです。私どもと共に何事かをなそうとします。使徒たちとは、後の教会のことです。彼らによってイエスの宣教が引き継がれます。イエスが福音を宣べ伝え、そしていやしたように、彼らも宣教し、人びとをいやし、人びとに奉仕し、そのわざを継いで行きます。

2　幸いとわざわい

イエスがお選びなった、イエスの働きをこの世で引き継いで、神の国の証しをなしつつ歩む彼らは、それなら、どのような存在であり、どのような規律のもとに歩むべきなのでしょうか。

それを平地の説教は語っています。六章の終わりまでです。今日の箇所は全体の序文に当たります。対応する結びは、四六節以下です。「家と土台」という見出しがついています。山上の説教とほぼ同じです。

いま申し上げましたように、「平地の説教」はだれよりも弟子たちに語られたものでした（六・二〇）。しかしそれだけでないことは七章一節に明らかです。「民衆」が聞き手として言及されています。イエスを信じ、そして従う者、その志をもつ者すべてに語られたものです。

少し中身に入ります。

今日の箇所、読んでお分かりのように、イエスの教えが散文の形で提示されているものではありません。断定的な、いわば祝福と呪いです。呪いという言い方が強すぎるなら、嘆きです。悲痛な嘆き、呻きです。

マタイの山上の説教には、この呪い、嘆きはありません。祝福だけです。平地の説教は、前半は幸いの言葉、後半は嘆きの言葉ですが、それぞれ対応しており、四つの組（ペア）になっています。もっとも印象深い最初の一組を見てみます。

貧しい人々は、幸いである。神の国はあなたがたのものである（二〇節）。
しかし、富んでいるあなたがたは、不幸である、あなたがたはもうなぐさめを受けている（二四節）。

ここに貧しい人々と富んでいる人々の対比があります。そして私ども人間のいわば常識に反して、貧しい人々は幸いであると語られ、富んでいる人々は不幸だ、わざわいだと、嘆きが語られます。

幸いというのは、そもそも、聖書では、人間が自ら獲得し所有するものというよりは、神によって人間に与えられるもの、祝福と考えられています。その祝福は、旧約では、長寿であったり、子孫の繁栄であったり、富や財産であったりしたのです。しかしその理解はイスラエルの苦難の歴史の中で少しずつ変化し、預言者や詩編あたりからでしょうか、むしろ貧しい人や、柔和な者人、苦しんでいる人、社会的に蔑まれている人たちに祝福と希望が語られるようになります。その流れはいまイエスにおいてもっともはっきりしてきます。

ところで、ここで神の国はあなたがたのものだといわれている「貧しい人々」とはだれのことでしょう。これを正しく受けとるためには、ルカによる福音書のここまでの箇所を振り返って見る必要があります。

たとえば、先々週私どもが見た、重い皮膚病の人です（五・一二）。彼はその病気のゆえに差別され、イスラエルの共同体の外に置かれ、宗教的には汚れた存在と見なされていました。それが、私どもが見たように、イエスによって清められ、社会に戻って行きます。あるいは私どもは、収税所に座っていて、イエスの招きを受けた徴税人レビ、すなわちマタイ（六・一五）のことを考えてもいいと思います。この両者とも、重い皮膚病の人も徴税人も、その病気のゆえに、その職業のゆえに、社会の中で差別され、罪人と等しい者と見なされ、共同体の外に、周縁に置かれていた人たちでした。

弟子たちのことを考えてもいいと思います。彼らは、安息日に、空腹で、麦畑で麦の穂をつみ、手でもんで食べたことを、当時の宗教家たち、ファリサイ派の人によってとがめられます。その意味で彼らも、宗教の拘束の強い社会で排除されようとしていた人々です。

イエスは目の前にいる「あなたがた」を「貧しい人々」と呼んでいます。彼らはたんに経済的な困窮者だけではありません。いま少し振り返ったように、色々な物差しによって差別され、社会の周縁に追いやられている人々、神にのみ望みを託している人々のことでもあります。

3　イエスから射し来る光

もう一つ、三つ目の幸いと不幸の組み合わせを取り上げます。

今泣いている人々は、幸いである、あなたがたは笑うようになる（二一節）。

今笑っている人々は、不幸である、あなたがたは悲しみで泣くようになる（二五節）。

これも第一の組み合わせと同じように、相反する二つのことが対照的に取り上げられています。違いがあるとすれば、第一の組み合わせでは、幸いが、つまり「神の国はあなたがたのものである」と現在のこととして語られているのに対して、いま上げた三つ目の組み合わせでは、幸いが、「あなたがたは笑うようになる」、「あなたがたは・・・泣くようになる」と、未来のこと、もっとはっきり言えば、終わりの日の幸いと不幸として語られていることです（二五節「その日」など）。

しかし考え方は基本的に同じです。簡単にいえば、私どもの人間的な見方、常識的な見方がひっくり返されているということです。これは、私ども、どのように受けとればよいのでしょうか。

少なくとも、イエスが言っているのは、いわば負け惜しみや、偽善的な気休めではありません。「貧しい人々」、「泣いている人々」、あるいは「飢えている人々」が常識として幸福でないことは明らかです。イエスは黒を白、白を黒と言いくるめているのではありません。

そうではなくてイエスは彼らを一つの関連性において見ているということです（バルト）。神の国との関連性です。

貧しい人々、泣いている人々、あるいは不当に差別されている人たちが、そこにいるとすれば、それは、その社会が、神の国に照らして新しくされなければならないということのまさに証拠ではないでしょうか。神の国は彼らのものでなければならないのです。反対に、富める人々、満腹している人々、笑っている人々、みんなにほめられる人々、そのような人たちにおいて、この社会が何であるかは必ずしも明らかになりません。その限り神の国がそれらの人々のものでなければならないことはない。というのも、彼らにとって、この世の現状はそれで十分よいものだからです。

神の国との関連において見られた貧しい人々、泣いている人々、あるいはののしられ、汚名を着せられている人々に、イエスから光が射して来ます。無力の中にある人々、低いところに、あるいは周縁に置かれた人々に光が落ちています。その光のゆえに彼らは、どんな状況の中にあっても、重い皮膚病の人がそうであったように、信仰をもってイエスに近づき、神にいやしを求めることをするのです。徴税人であったレビのように、イエスの恵みを証しする人となるのです。

イエスの光はなぜそのように人を立ち上がらせる力なのでしょうか。それはイエスご自身が十字架への道によって、そのよみがえりによって神の命と祝福とにあずかったからです。イエスは人間の悲惨をすべて自らのものとし、それらをあがない、清め、すべての人に新しい命と望みとを与えてくださいます。この方が、私どもと共にいます。そのイエスの光の中を私どもは、神の国の民として、神の支配の現実に生かされて歩んで行くのです。

（二〇二一・五・三〇）